

# 感情記憶と感情智識による高次元感情推論 (人工頭脳の基礎理論 II)

## ～感情記憶から感情智識の成長学習による感情推論 A | ～

### 1. 感情推論の仕組み

《展示デモにて公開中》

自律覚醒型細胞の感情推論は3つの作用で構成される。

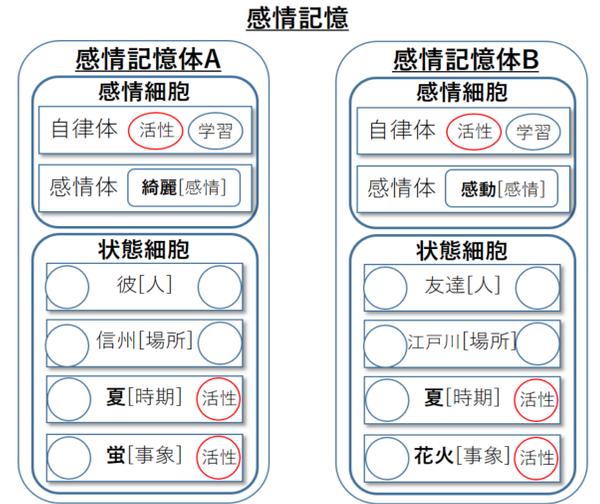
#### (1) 感情記憶への記録作用

- 感情記憶機能は推論対象者の感情体験を記憶する。
- 右図の例では、以下の感情記憶が形成される。

記憶 A : [彼]と[信州]で見た[夏]の[蛍]が《綺麗》

記憶 B : [友達]と[江戸川]で見た[夏]の[花火]が《感動》

- 状態値を状態細胞に記録して感情値を感情体に記録する。



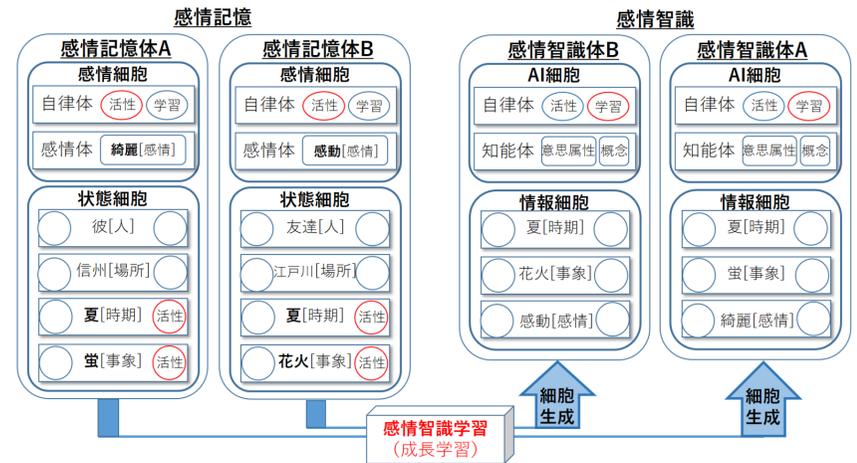
#### (2) 感情智識の成長学習作用

- 感情記憶の情報から感情智識を学習生成する。
- 右図の例では、以下の感情智識が生成される。

智識 A : 《綺麗》なのは[夏]の[蛍]

智識 B : 《感動》したのは[夏]の[花火]

- 成長学習は人工脳の自己意思(内包性や外延性)の定義に従い高次元レベルに智識を成長させる。

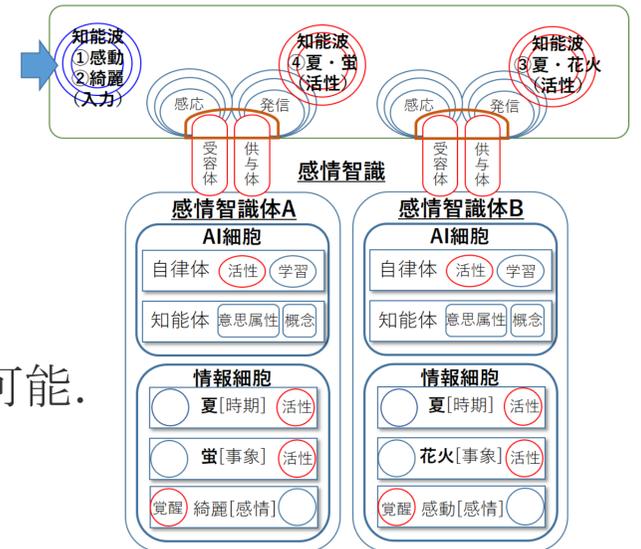


#### (3) 感情智識による感情推論作用

- 感情智識の自律覚醒細胞により感情推論を行う。
- 右図の例では、以下の作用が行われる。

入力される知能波(①[感動]②[綺麗])により、感情智識の情報細胞が覚醒して、[夏][蛍]と[夏][花火]を活性化する

- 感情智識は個人感情だけではなく社会等の集合感情でも可能。
- 感情記憶が消去されても感情智識は智識として存在する。

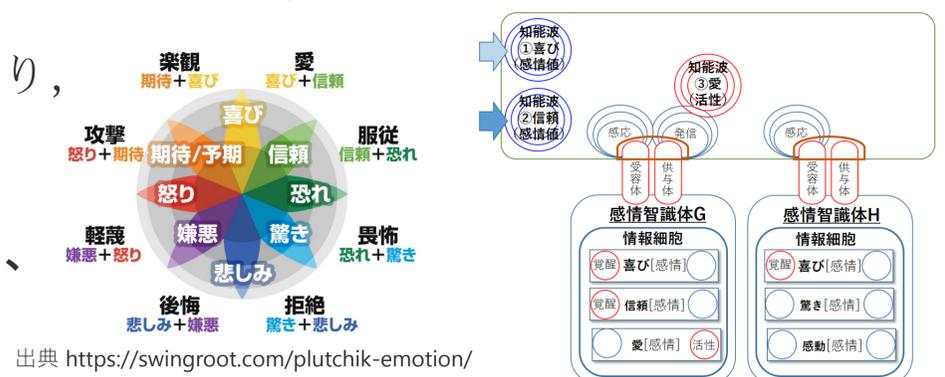


### 2. 混合感情推論の仕組み

混合感情推論は複数の基本感情で構成される混合感情を理解する感情推論作用である。

- プルチック感情モデル※の感情智識細胞により、複数の知能波から混合感情推論を行う。
- 右図の例では、以下の作用が行われる。

入力される知能波(①[喜び]②[信頼])により、G智識細胞が覚醒して、[愛]が活性化する



出典 <https://swingroot.com/plutchik-emotion/>

※1980年にアメリカの心理学者ロバート・プルチック氏により提唱された感情モデル。8個の基本感情と基本感情から生まれる24個の混合感情を分類表現。